

# 人間の経済

第2期 第 **51** 号 (通巻 129号) 2006年6月29日

## 目次

週刊マーケットレター (06年6月26日週号)

主要マーケット指標

円安ドル高と外人の日本株売り

4-6月期の景況悪化、業績不安募る

対米輸出好調、一般機械や乗用車が伸びる

曾我 純

quote of this week/

逸者の利と勤労の産

森野 榮一



## 週刊マーケットレター（06年6月26日週号）

2006年6月25日

曾我 純

### ■主要マーケット指標

為替レート	6月23日（前週）	1カ月前	3カ月前
円ドル	116.55(115.15)	111.95	117.85
ドルユーロ	1.2505(1.2640)	1.2815	1.1975
ドルポンド	1.8185(1.8495)	1.8850	1.7355
スイスフランドル	1.2485(1.2310)	1.2065	1.3175
<b>短期金利（3カ月）</b>			
日本	0.34375(0.31750)	0.19625	0.11125
米国	5.48000(5.41375)	5.21000	4.96000
ユーロ	2.99713(2.97250)	2.90363	2.73613
スイス	1.50000(1.48000)	1.41667	1.22000
<b>長期金利（10年債）</b>			
日本	1.870(1.805)	1.795	1.715
米国	5.22(5.13)	5.02	4.73
英国	4.75(4.62)	4.63	4.34
ドイツ	4.07(3.94)	3.93	3.67
<b>株 式</b>			
日経平均株価	15124.04(14879.34)	15599.20	16489.37
TOPIX	1545.57(1534.71)	1579.26	1680.09
NYダウ	10989.09(11014.55)	11098.35	11270.29
S&P500	1244.50(1251.54)	1256.58	1301.67
ナスダック	2121.47(2129.95)	2158.76	2300.15
FTSE100（英）	5692.1(5597.4)	5678.7	5990.1
DAX（独）	5529.74(5376.01)	5678.49	5947.11
<b>商品市況（先物）</b>			
CRB指数	335.04(339.22)	352.37	325.94
原油（WTI、ドル/バレル）	70.87(69.88)	71.76	63.91
金（ドル/トロイオンス）	584.8(578.0)	673.0	550.1

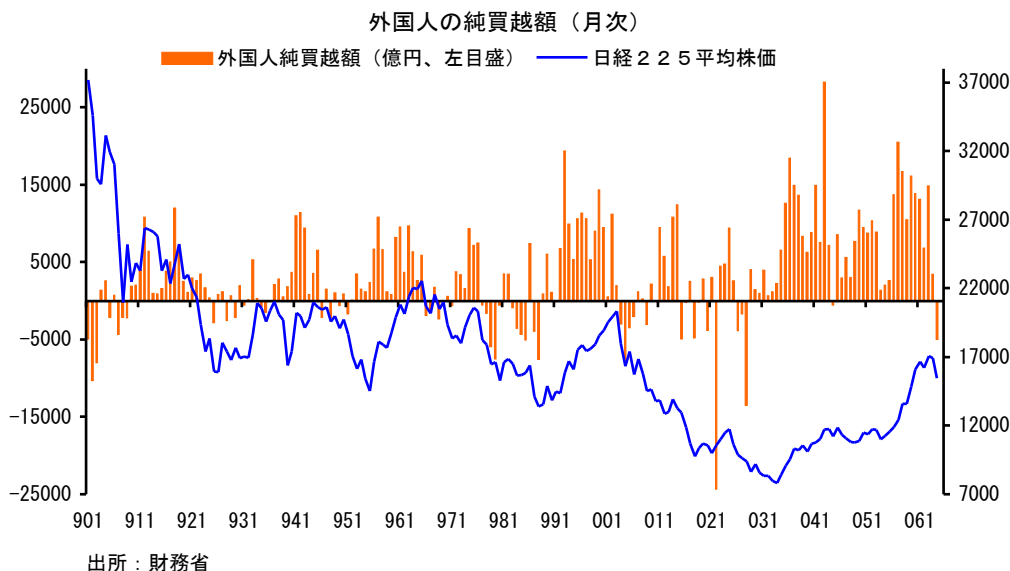
### ■ 円安ドル高と外人の日本株売り

米国の利上げと日本のゼロ金利継続見通しにより、対ドルで円は約2ヵ月ぶりに116円台に値下がりした。5月の米住宅着工件数は195.7万件、前月比5.0%増加し、4月まで3ヵ月連続減と先行きを不安にさせていたが、ひとまず増加に転じ、景況感にプラスに作用したようだ。米長期金利は5.2%台まで上昇したが、長期的にはまだ低い水準にあり、住宅着工を著しく阻害する要因にはならないだろう。住宅着工が緩やかに減少していけ

ば、消費者物価を落ち着かせることにもなり、景気拡大を支えることにもなる。

設備投資もまだ高い水準を維持できそうである。5月の米耐久財受注によると、資本財（航空・軍需除く）は前月比1.0%と2ヵ月ぶりにプラスとなり、前年比では10.0%の増加だ。在庫は前年比4.0%増にとどまっており、受注の伸びを下回っている。米国企業の設備投資意欲は旺盛であり、いまのところ長期金利の上昇もさほど影響していない。

消費が底堅く設備投資も堅調であれば、FRBは物価に軸足を移した政策を強めるだろう。消費者物価のコアが緩やかに上昇している段階では、政策金利を打ち止めにするような兆しはみせないはずだ。景気減速がそれほど感じられず、物価がじわじわ上昇することは、FRBにとっては耐え難いことであろう。FOMCの開催は6月28、29日、8月8日、



9月20日と続くが、このあたりまでは利上げが実施されるのではないだろうか。

福井日銀総裁は空元気を出したのか、20日の講演で金融政策は「早めに、小刻みに、ゆっくり政策対応していく」と発言したが、景況判断が悪化し、株価も下落している経済環境では利上げなどできないだろう。米国との金利差は広がるばかりであり、円安ドル高がさらに進むはずだ。

日本株を保有している外人にとって、円安ドル高は日本株の減価となり、外人の日本株の処分売りが続くかもしれない。5月、外人は日本株を5,039億円売り越した。月次で売り越したのは04年5月以来、2年ぶりであり、規模としては02年9月以来である。昨年、外人の買い越し額は12.5兆円と過去最高を記録し、03年以降今年4月までの累計買い越し額は36.6兆円という途方もない額となっている。

日本の株価が下落するタイミングはいつも外人の売り越しの時期に一致している。一旦売り越しになると、外人はしばらく売り続ける姿勢をとる傾向がみられることから、

6月以降も売り優勢で推移するだろう。外人の日本株に対する考え方によっては、日本株は思いも寄らない水準まで下げるかもしれない。

#### ■ 4－6月期の景況悪化、業績不安募る

内閣府・財務省の『法人企業景気予測調査』（5月25日調査）によると、4－6月期の「貴社の景況判断BSI（「上昇」－「下降」社数構成比）」（大企業全産業）は1.8%と05年10-12月期の10.5%をピークに2四半期連続で低下した。売上高判断BSI（「増加」－「減少」社数構成比）は0.1%と3四半期連続の低下となったほか、経常利益判断BSI（「増加」－「減少」社数構成比）も-3.6%と1年ぶりのマイナスとなった。

同調査によれば、今年度上期の大企業全産業の売上高は前年比5.3%増加するけれども、経常利益は1.2%減少する見通しである。ただ、同下期の売上高は3.0%に減速するが、経常利益は6.7%増加し、06年度では3.0%の増益を見込んでいる。製造業、非製造業とも上期は小幅減益予想だが、下期、製造業は10.4%の2桁増益に回復し、通期では4.7%増を目論む。いずれにしても、今期の利益予想の伸びは小さく、今後の経済動向によっては減益に陥ることも否定できない。

株価を決める最大の要因である利益が不確かになっていることが、株価を不安定にしているのである。四半期決算の普及により、7月半ば以降、4－6月期の業績発表がある。『法人企業景気予測調査』に基づけば、上期は減益になるが、4－6月期の業績がその線にそったものであるかどうか重要視される。減益幅が大きく、その後の回復シナリオを描くことができなければ、外人の失望売り見切り売りができるだろう。

#### ■ 対米輸出好調、一般機械や乗用車が伸びる

日本の輸出は引き続き好調であり、5月も数量ベースで11.5%増と2ヵ月ぶりに2桁増となった。特に、対米輸出（数量ベース）は16.1%と02年11月以来3年半ぶりの高い伸びをみせ、輸出面からみれば米国経済の需要は強く、景気の拡大ペースは速いように受け取れる。

金額ベースの対米輸出は20.6%増加したが、なかでもガソリン高により日本車の魅力が増しているのか乗用車が好調であり、輸送用機器は27.6%も伸びた。資源高により資源開発が盛んになっていることから、資源開発に関連する機械である建設機械や工作機械にたいする需要も強く、一般機械の輸出は22.8%も増加した。

原油や非鉄等の価格が高い水準を保つことができれば、一般機械の輸出も好調を維持できるだろう。国内需要は不振だが、原油高で燃費のよい日本車が、海外で売れる状態が持続すれば、自動車生産用の機械需要も期待できる。資源高の日本の機械メーカーに及ぼす影響は強く、日本の鉱工業生産も輸出に依存した体質からなかなか抜け出せないでいる。

quote of this week

## 逸者の利と勤勞の産

森野 榮一

武田泰淳は『ニセ札つかいの手記』で、居酒屋大樽<sup>おおたる</sup>で、ニセ札を巡る、そのおかみさんや客の牛乳屋、八百屋、大工職人らの会話をこう描いていました<sup>1</sup>。

「ハイ、このガンモは、本物のガンモ。それから、このコンニャクも、本物のコンニャク」

と、大樽<sup>おおたる</sup>のおかみさんは、驚くほど長い箸<sup>つりざお</sup>を釣竿のように垂して、湯気の立つ、見るからにおいしそうなのを、私と源さんの皿の上を下ろしてくれた。

「うちの牛乳だって、本物だよ、おかみさん」と牛乳屋さんが、負けずに言うと「そうよオ。うちの大根や、うちのキャベツだって、みんな、お前さん、正真正銘の大根であり、キャベツでありますからな」と、八百屋の主人も負けずに言った。「そうさあ。もしも本物じゃなかったら、誰がそんな大根やキャベツを食べるかよオ」と、二人は、顔と顔を近よせて敵対するようにして言った。紙でこしらえたガンモ、ゴム製のコンニャクだったら、私だって食べられないが、このガンモとコンニャクの箸ざわり歯ざわりは本物だけにイイなあ、と思いながら、私は舌鼓を打って食べていた。

「だから、食べるモノ、飲むモノには要するにニセモノは通用しねえってことになるんだわさ」と、大工職人は、二人の仲裁をするように言った。「要するに品物は、ニセだったら通用しねえんだ。お札は品物じゃあねえ。だから、ニセ札でも通用するんだわさ」

「アレ。お札は品物じゃないんですかねえ」と、私は言わずにいられなくなった。「ひどい。ひどいなあ。お札が品物じゃないとすると……」大工さん(少しケンをおびた顔つきで)「千円という字が印刷してある紙きれじゃねえか。あんなものが、品物であってたまるかよ」私「しかし、印刷してある紙と言え、紙は品物だから、つまり品物のように思われるがなあ」大工さん「アタマのわるい兄さんだなあ。紙なら紙とハッキリしてれば、それは紙という品物なんだ。ところが、なんだい、あの千円札という奴は。紙のくせにオサツですって面<sup>つら</sup>してるから気に入らねえんだ。要するにだ。カミのニセモノがお札なんだ。わからねえのかなあ、それくれえのことが」私「ひどい。ひどいなあ。紙

<sup>1</sup>武田泰淳、『ニセ札つかいの手記』、昭和38年6月「群像」に発表、その後「日本現代文学全集」(講談社)などに再録。

の二セモノがお札とはなあ」大工さん「ひどい？何もそう、ひどがるこたねえじゃねえか。ひどいだってえ。偽善者みたいなこと言うなッ。お前さんが何も、千円札の味方するこたねえじゃねえか。それとも、なんだ。お前さんがそんなに千円札をかばうところを見ると、お前さん、千円札の元締か製造販売本舗ほんぽでもありなさるのか」私「……千円札といえば、そうとうのシロモノだからなあ。だから、それをそういう風に軽蔑したみたいに批判するのは、ぼくはどうもむずかしいですよ」大工さん「だから、そんなボクなんかどっかへやっちまえよ。千円札がなんだってんだい。私はホンモノの千円札でありまするッて、あのイケシャアシャアした態度が気に入らねえんだ。そうだろう。そうだろうと思わねえなら、お前さんは千円札のマワシモノだぞ。なんだい、あんな奴。私は紙でありまするッて、紙の二セモノでありまするッて正直に打ち明けてくれれば、こっちだって、ねえ、なにもそうそういじめようとは思わねえよ。おれなんか全く千円札をもらってよ。その千円札を糞だめかドブに漬けて、コンブみてえにしてから使ってやろうと思ってるんだ。なあにが、あんなにえらそうにして、手マチン二千円、ハイ二枚なんて、当然の権利のような顔をして、おれたちの手にわたされなきゃならねえんだよ。聖徳太子の顔で、おどかそうとしたって、こっちゃあ、知ってるもんかい。こわくねえぞ、おれは、お札なんか。あんな、うす汚いモノを沢山もってるか、もってねえかで、かみさんや奥様や娘ッコたちの評価、やさしく言えば評ばんが良くなったり、わるくなったりするという、その根源を、そもそも、要するに、考えないでにおいて……」私「根源というのを考えるのは、むずかしいから厭だなあ。コンゲンなんて、そんなあんまり大きい大問題を出してこられても、ほんとうに弱っちゃうなあ」すると、大工さんは気むずかしそうに、プイと横を向いてしまった。…

ここで「私」とは偽札使いです。彼はホンモノのお札の偽札を使っています。しかし、飲み屋での大工の話にうろたえるわけです。お札なんてものは紙の二セモノだと。「紙のくせにオサツですって面してる」、紙なら紙で品物として人の役にもたとうが、オサツは紙の役にはたたないと。たしかにオサツというえらそうな振りをしていると、たき付けに使う人はいません。オサツとは品物ではない、偉そうな振りをした何かなのです。それは紙の二セモノだ…そんなうす汚いモノを沢山もっているかどうかで、人の評判がよくなったり、悪くなったりする、そのコンゲンを考えると。

「私」の他には、この飲み屋のシーンに出てくる大樽のおかみさんも牛乳屋も八百屋も大工もみな、人々が必要とするモノを作り、提供することで生業を営んでいます。いわば実体経済を指し示す人々です。みなホンモノを扱っています。私たちが豊かであるかどうかは、そうしたホンモノをどれだけ享受できるかにかかっ

ています。それは勤労の所産でもあります。しかしオサツを作っているところは、私たちの実質的豊かさにつながるものをつくるのではなく、紙のニセモノ作りに励んでいるかのようです。たしかにオサツはお芋の「オサツ」なら栗よりうまいでしょうが、このオサツは食べられません。

「私」はお札のニセを使い、そのなかでお札はホンモノと信じ込んでいました。しかし大樽での話で混乱していくわけです。ホンモノは、勤労の産物であり、お札はそうではないという事実を指摘され、大工さんには千円札の回し者呼ばわりまでされてしまいます。

最近、お札を出しているところの総裁が貨殖に走り、批判を浴びています。どうもその地位に居座り続ける様子ですが、庶民から見ると納得できないでしょう。日銀の製品はお札です。大工さんにいわせれば、紙のニセモノ使いです。そのほかに手がけている製品はありません。それは、大樽のおかみさんの作るガンモのようにおいしい製品ではありません。そんなところのトップがカネがカネを生む利殖に一生懸命だったとは。

はるか昔から我が国では、二種類の利得を区別してきました。逸者の利と勤労の産です。そして前者を批判的なまなざしで見てきました。

日本語で、逸者とは世俗に煩わされず、風雅に遊び、悠々自適の生活を送る人を指しますが、要するに勤労せぬ人のことです。そうした人の上げる利を逸者の利と呼びました。金銭貸借における金利、なんらかの特権による利得など、つまりは労働に依らずに手に入れる不労取得を指しました。紙のニセモノつくりのところのトップは、あれだけの収益をあげるファンドに投資できたということは、やはり特権によって利得を得ていたとしかいえないでしょう。

これに対し、「勤労の産」とは、労力の支出により稼得する利得を指しました。我が上古においては、前者は努めて社会的に抑制、除去されるべきものとされてきました。

理由は、不当な社会的区別・差別の基となると認識されていたからです。しかし歴史をみればそれがうまくいかなかったことは歴然です。それはこうした種類の利に社会的規制をかけることに成功しなかったことが原因でしょう。しかし逸者があまりにうまいことをやり、富と権力を手にいれ社会的格差がひろがりやすくと、そうした富者や権力者すらアブナイめに会うことになりかねません。我が国の歴史では、平安末期になりますと、権力・富力の懸隔が重大な社会的騒乱を呼び、ついには富者に対する略奪の発生をみます。国家がその法制等を通してこれを統制しえぬとき、それによって利を得た勢力も最後はリスクをとらされるわけです。これは洋の東西を問いません。歴史をみれば、その後、私権の相争う社会が私たちの社会であったことがわかります。

現代もコイズミ改革で十分に格差のある社会となりました。逸者の利を求めんとするものたちはヒーローであるかのように振る舞いました。しかし、いつかじぶんたちの利が成立するのも、勤労に従事する人々の努力の故であったことを知るでしょうが、それについては口を開くことはないでしょう。「勤労の産」は収奪

され続けるのかもしれませんが。

現代は情報社会です。紙の二セモノを使う者たちはそれを電子の形態にし、取引の利便を享受しています。こうした社会は逸者の利の立つ程度を莫大なものとなりました。実体経済の制約を離れて電子化された紙の二セモノは膨大に成長し続けています。しかしその利はほんとうの豊かさをもたらしているのでしょうか。社会を前進させるどころか、後退せしむる「虚妄の権利」なのかもしれません。やはり、大工さんのように、「こわくねえぞ、おれは、お札なんか。あんな、うす汚いモノを沢山もってるか、もってねえかで、かみさんや奥様や娘ッコたちの評価、やさしく言えば評ばんが良くなったり、わるくなったりするという、その根源を、そもそも、要するに、考えないでにおいて……」といわねばなりません。「私」は偽札つかいからホンモノの富が作られ配分され消費される実体経済の世界へ進む必要があるのでしょうか。お札がもしその経済をゆがめているとするならば、お札の世界のほうが問題だといわれるべきでしょう。「私」は紙の二セモノつかいに偽札によっては対抗できないことを知るべきなのでしょう。

ゲゼル研究会では第二期「人間の経済」誌の原稿を募集しています。

ゲゼル研究会では会誌、「人間の経済」を刊行してまいりましたが、会員の各地に叢生する地域通貨の動きへの関与等により、刊行継続の体制がとれず、1年ほど休刊のやむなきに至っております。

しかし、社会経済状況の変化や多様化する各地の貨幣改革の展開を見るに、時宜を得た会員の諸研究を世に問う必要性を痛感しているところです。

また、各地からの問い合わせ、情報提供の依頼も多く、会としての系統的な情報の提供、焦眉の課題に関する研究成果の迅速な公開の必要性も強く感じてきたところです。

今般、体勢を立て直し、会誌「人間の経済」再開（第二期創刊）に取り組むこととなりました。

基本的な会誌の性格は第一期と変わるものではありません。

理論的な研究から各地の取り組みの現状、そのナマの声まで、多様なテーマの論考を掲載していきたいと考えております。

広く論考を求めていますので、諸姉諸兄のご支援、ご協力をお願いいたします。

第二期、「人間の経済」、簡易印刷版、及びHPでのPDF版提供

不定期刊

投稿資格 特に設けず

投稿 常時受け付け

投稿論文の著作権は著者に帰属

原稿料はありません

ご連絡は [info@grsj.org](mailto:info@grsj.org) まで。

人間の経済 第二期第51号(通巻129号)  
2006年6月29日刊

---

編集・発行 ゲゼル研究会  
221-0021 横浜市神奈川区子安通3-321 森野榮一気付  
Gesell Research Society Japan  
<http://grsj.org/>  
[info@grsj.org](mailto:info@grsj.org)  
Gesell Research Society Japan all rights reserved 許可無く複製・再配布を禁ず

---



ゲゼル研究会